



駿府と今川氏

第16回

五山の文化と茶の湯

五山文学のメッカ 建仁寺と義元

今川義元が梅岳承芳と称し、少年僧として修行を積んでいたのは富士の善得寺だったが、承芳の養育係でもあり兄弟子にあたる雪斎は「承芳に京都の禅寺で修行させたい」と考えるようになり、今川氏親の許可を得て、京都の建仁寺に入った。

建仁寺は臨済宗で、室町幕府三代將軍足利義満のときに定められた京都五山の一つであった。ちなみに、京都五山とは建仁寺のほか天龍寺・相国寺・東福寺・万寿寺で、その上に別格として南禅寺があった。

当時、京都五山では五山文学が盛んで、文学といっても今日の小説などの文学ではなく、中国の典籍に通じ、自ら漢詩文を作るというものである。梅岳承芳、すなわちのちの義元はこの五山文学にめり込み、公家たちの間でも評判となるような漢詩を作っていた。

ただ、「本当の禅を京都の禅寺で学ばせたい」と思っていた雪斎にとっては、五山文学にのめり込んでいった承芳を手放して喜んでいるわけにはいかず、結局、承芳

を連れて建仁寺を飛び出している。

その後、雪斎と承芳の二人は妙心寺の門を叩き、その大休宗休の教えを受けるのである。もともと、戦国大名となった後の義元は、駿府において五山の文化を普及させる施策を行っていたので、五山の文化を全て否定してしまっただけではなかったことがわかる。その施策というのが、臨済寺および善得寺で行った印刷事業で、駿河版と呼ばれ「聚分韻略」と「歴代序略」の二種が知られている。

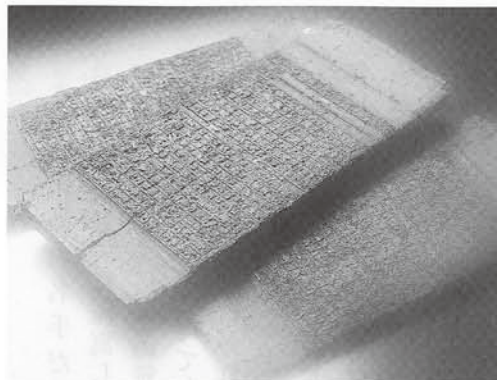
義元と茶の湯

当時の禅寺では、「書院の茶」と呼ばれる茶の湯が盛んだった。これは、千利休によって大成される侘び茶、すなわち草庵の茶ではなく、その少し前の段階ということになる。したがって、義元が好んだ茶の湯も「書院の茶」であろう。ただ、侘び茶への移行期でもあるので、両方をたしなんでいた可能性はある。

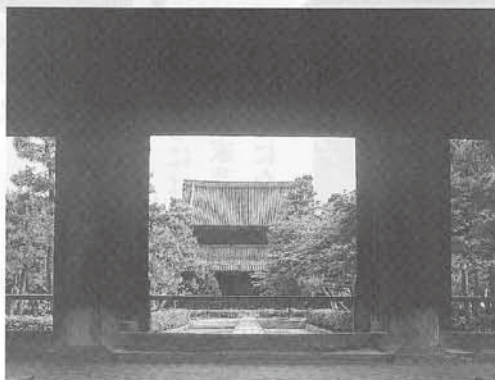
茶掛の絵として著名な「遠浦帰帆」図を義元が所蔵していたことは有名で、また昭和五十七年（一九八二）に発掘調査が行われた駿府公園内の今川氏遺構と思われる部分からは、天目茶碗・水指など茶道具が大量に

出土しており、茶の湯が盛んだった様子が実証された形となった。

なお、義元は永禄三年（一五六〇）五月十九日に桶狭間で織田信長に討たれたときも白子の茶会を開いていたと言われている。



▲「歴代序略」（静岡市清水区興津 清見寺蔵）



▲建仁寺（京都府京都市東山区大和大路四条）

撮影：水野 茂（2点とモ）